

審査委員会報告書

(課程博士用)

報 告 番 号	甲 第 1168 号	授 与 年 月 日	平成 29 年 9 月 29 日
学 位	博 士 (看護学)		
氏 名	生 年 月 日	昭和 35 年 10 月 18 日 生	
	氏 名 (国 籍)	臼井 雅美	
論 文 題 目	家族システムケアアプローチを用いた周産期家族支援プログラムの開発研究 —初めて親になる夫婦の妊娠期からの介入を通して— 英文名： Development of perinatal family support program with the family systems care approach : Intervention for prospective parents expecting their first baby		
主 論 文 冊 数	1 冊		
審査委員会委員	(氏 名) 主査 北里大学 教授 小島 ひで子 北里大学 教授 松谷 伸二 文京学院大学教授 中村 由美子		
論文内容要旨 審査結果の要旨 試験結果の要旨	別 紙 1 別 紙 2 別 紙 3		
審査委員会の意見	審査の結果、博士（看護学）の学位を授与できると認める。		

- 【注】 1. 報告番号、学位記番号、授与年月日は、研究科委員会の審査後に研究科において記入する。
2. 国籍は、外国人のみ記入する。

審査結果の要旨

審査対象者 臼井 雅美

妊娠期は親になる「移行期」の始まりであるが、この時期の問題として子どもを持つことによる夫婦関係の悪化や、夫婦の親密さの低下が指摘されている。そのため、この移行期には夫婦が育児をする上での悩みや心配事を共に考え、相談し合える関係性が不可欠であり、心理的な交流を通して夫婦の絆を深め育てていくことが重要である。日本における育児支援施策の多くは、母親への支援を中心に展開されているが、親としての資質や準備性を問うならば、親になるまでの生涯発達を視野に入れた妊娠期からの支援が必要となる。本論文は「家族支援システムケアアプローチ」による「周産期家族支援プログラム」の開発を目的に、周産期に初めて親になる夫婦を対象とし、方法論的トライアンギュレーションを用いて検証をおこなっている。

本論文の結果として、「家族システムケアアプローチ」を用いた「周産期家族支援プログラム」は、本プログラムの特徴であるジェノグラム・エコマップを用い、家族構造と家族へのサポートを可視化することにより、出産後の家族や将来的な家族像のイメージ化が可能となり、家族関係やサポートについて認識できることが示された。また、「自分にとって『家族』とは何なのか」を考える機会にもつながり、家族の中での役割や責任を再認識すると共に、夫婦をサポートする存在として経済的資源の役割を持つ家族機能に対する認識を高めることも示唆された。さらに、本プログラムは、従来のマタニティクラス等とは異なった内容であり、妊娠中に家族を考えることの意義が確認された。一方、主観的幸福感の向上や自己効力感の高さと家族機能の強化との関連性は認められず、夫が抑うつ状態の場合は、本プログラムを受けても家族機能は強化されないことが示唆された。

初めて親になる夫婦に対する妊娠期の支援プログラムは、健康管理や出産準備教育に重点をおいたものが多く、新しい家族を迎えるに際して、家族の関係性に着目し家族システムを構築していく支援プログラムは、ほとんどみられない。本論文は、初めて親になる夫婦を中心とした家族システムに働きかける「家族システムケアアプローチ」に着目した、家族看護学の視点からの「周産期家族支援プログラム」開発研究であり、母性領域における新規性のある看護研究として評価できる。さらに家族やその関係性を可視化する効果が、家族システムの移行をスムーズとし、家族機能の強化につながることを示唆した点からも評価できるが、一方で周産期看護学の視点だけでなく、家族看護学の視点からも考察をより深めることの必要性が指摘された。

今後は、妊娠時期に応じた項目内容を精選し「家族システムケアアプローチ」を用いた「周産期家族支援プログラム」を用いることで、家族システムの移行が促進されるなど看護実践における発展性が期待される。

以上より、学位審査委員会では、看護実践の向上に意義を有し、看護研究の発展に寄与する研究であると評価することから、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものと認める。

試験結果の要旨

審査対象者 白井 雅美

上記の論文提出者に面接し、論文内容および関連事項について試問をおこなった結果、合格と判定した。

よって、博士（看護学）の学位を受けるに十分な能力を有すると認めた。